

あきる野の山林を複数頭のツキノワグマが生息域として利用しています。

「東京のツキノワグマは禁猟なので、生息頭数は増えている？」との話を耳にします。確かに、あきる野でも、子育てをしている痕跡が見られます。中でも春～初夏に見られる「クマ剥ぎ」がクマの生息を確認する重要な痕跡です。

クマ剥ぎは、針葉樹の外皮を強力な爪と前足の力(腕力?)で剥ぎ取り、外皮下の形成層(生きている細胞)を歯や爪で削り取って食べる行為です。



(上) 形成層を削り取った痕跡

ツキノワグマは、2月の越冬中に子供を出産します。春になり、活動を始めた母グマは子グマを連れて森の中で採食を始めます。この時、母グマは自分が教わったクマ剥ぎを子グマに伝えます。剥ぎ方だけでなく、樹種や木の大きさも代々継承されます。

市内の古いクマ剥ぎ(10年以上)を調べると、大径木のスギを嗜好していることがわかります。これが以前から市内に生息するクマの特徴と言えます。奥多摩から秩父にかけて生息するクマの中には、ヒノキの中径木を嗜好してクマ剥ぎをするグループがいるそうですが、近年、このグループ由来のヒノキのクマ剥ぎも市内で目にするようになってきました。

クマ剥ぎについて、もう一つ気になる点があります。最近では、クマ剥ぎを上手に教えられない若い母グマが増えているのでは?と思っています。

昨年からは、外皮は剥ぐが形成層を削り取って採食していないクマ剥ぎが見られるようになりました。

本来クマは、生まれた年の春から母グマと行動を共にして、季節ごとの餌の取り方などをきっちりと教え込まれ、翌年の初夏に母グマから離れて、一人立ちするはずなのですが、今のクマ剥ぎの状況を見ると、上手に教わっていない個体がいるようです。



(上) 外皮は剥いているが、形成層を削り取っていない痕跡

採食行動をうまく覚えられなかったクマは、自分が親になったときに、その子供たちに上手なクマ剥ぎを教えられず、大切な行動パターンを継承していくことができなくなります。ツキノワグマ社会の伝統文化の崩壊が始まっているのでしょうか?さらに、本来、森の中で人目を避けて暮らしているツキノワグマが、上手に採食できず、空腹を満たすため、人里へ下りてくるのが危惧されます。

# 新しいクマ？

## ヒノキ嗜好のクマが増えています

### サインポスト

クマは行動範囲が広く、固定したなわばりを持ちません。食べ物が不足するとその行動範囲を広げるため、新たな場所に移動したときに、道に迷わないよう木に目印をつける行動がサインポストと言われています。その他、自分のテリトリーを示すものとも言われています。

市内で見られるサインポストの多くは、これまでネムノキやカラスザンショウが利用されていましたが、今年、ヒノキ嗜好のクマの痕跡が見られる場所では、コメツガをサインポストに利用している個体がありました。

サインポストに利用する樹種も母グマから引き継がれている行動だと考えると、コメツガは比較的標高が高い所(600m以上)で見られる樹種のため、奥多摩・秩父由来のクマの習慣だと考えると納得できます。

このようにクマの行動パターンが母グマから子グマに引き継がれて行くことから、その出自の見当をつけることができます。



スギ



スギ



ヒノキ



ヒノキ



ネムノキ



ネムノキ



カラスザンショウ



コメツガ



コメツガ

### ヒノキを嗜好するクマ

昨年はそれほど気にならなかったヒノキへのクマ剥ぎは、今年になって明らかに増加しています。これは、奥多摩・秩父由来のクマの証で、新規にあきる野に移入してきたと考えられます。

理由を考えても正確なところは分かりません。(クマに聞ければ良いのですが...)

考えられるのは、本来の生息エリアの個体数が増加したために、生息密度が過剰になり、押し出されるようにあきる野に入ってきたという可能性が一つあります。

もう一つ、本来の生息エリアで生息条件を掻き乱す環境の改変があり、それまでの生息エリアを放棄して分散してあきる野に移入してきたということも考えられます。

どのような理由にせよ、あきる野を生活圏に持つツキノワグマは増加傾向にあると考えています。

(杉野)